



東京2020オリンピック・パラリンピック 振り返り企画 「共生社会」「多様性」の 象徴として躍動

東京パラリンピック ボート「PR3 混合舵手つきフォア」出場
戸田中央総合病院RC 八尾 陽夏 選手(漕手)・立田 寛之 選手(舵手)

Interview



——まずは、東京パラリンピック(以下、東京パラ)の舞台に立ったときの心境から教えてください。

八尾 ■ 今回の日本出場はパラローイング史上初でしたので、まずはスタートラインに立てたことに感謝の気持ちでいっぱいでした。そして、しっかり記録・記憶に残るレースをしようと臨みました。

立田 ■ これまで14年間ボート競技に携わってきたなかで、優勝が懸った日本選手権や負けられない試合を数多く経験してきました。それに比べると、日本は挑戦者の立場だったので、その点はプレッシャーなく試合に挑むことができました。ただ、メディアなどから応援してもらった機会が予想以上に多かったのは驚きました。応援していただいた方の声になる——、それが想像以上でした。

——予選、敗者復活戦、順位決定戦と3レース行われたなか、敗者復活戦では予選よりタイムを20秒縮めました。要因はありますか？(予選タイム:8分14秒09、敗者復活戦タイム:7分52秒35)

八尾 ■ 予選では中盤にスピードの落ち込みがありましたが、敗者復活戦ではそこをしっかりと修正し、2,000mを通して良いレースができたと思います。

立田 ■ 2つ要因があると考えます。ひとつは、予選終了から敗者復活戦までの間、じっくり考える時間が持てたこと。もう一つは、コンディショニングにおいて、暑熱対策等の準備時間が十分持てたのが影響したと考えます。内容においては、予選は隣のレーンに世界最速と評される英国が序盤から飛ばし、早い展開に持ち込まれたため、自分たちのレースに集中することができませんでした。一方、敗者復活戦では、対戦相手との距離が近く、漕手のモチベーションに「ゆるみ」が出ませんでした。ですから、事前準備・環境も含めて、敗者復活戦はすべての体制が整ったこと、それがタイムにあらわれたのだと考察します。

——立田選手に質問します。かじ取り役である「コックス」として、チームをまとめ上げるために、これまでどういったことに取り組みまし

たか。

立田 ■ ひとつは、事前合宿中にメンバー1人ひとりと話し合ったことです。タイム・順位はもちろん、個人個人がパラの舞台で何を表現したいのか、時間をかけて話し合いました。東京パラは人生で一度きりの大舞台です。自分を押し殺してチームに貢献するというより、「自分はどうしたいのか」を話し合い、対話を通して、互いの考え方や競技に対する想いなど、理解を深めていきました。それが結果的にクルーを構築するうえで重要なことだったと思います。

八尾 ■ 3週間の事前合宿で仲間意識が高まったのは確かです。部屋でTVを見る、ストレッチを一緒に行うなど、日常を共に過ごすことは仲間を知るうえで大切な時間でした。木村由選手とは女子トークもしましたね(笑)。



写真左から木村選手、立田選手、西岡選手、八尾選手、有安選手

1年延期となった東京2020大会は、7月23日(祝・金)からオリンピック競技大会が開会し、9月5日(日)のパラリンピック閉会式をもって終了しました。両大会で熱戦が繰り広げられたなか、東京パラリンピックのボート競技「PR3混合舵手つきフォア※」に戸田中央総合病院ローイングクラブ所属の八尾陽夏選手、立田寛之選手が出場しました。さまざまな障害がある選手と健常者の選手が男女で一緒に艇に乗る同競技。境遇の異なる人々が手を携えて暮らす「社会」を体現するかのよう同競技は、「共生社会のヒント」「多様性の象徴」として、多くのメディアが注目しました。ここではお二人に、パラリンピックを終えての想いを伺いました。

※パラローイングのなかで最も障害の度合いが低い選手が出場可能な種目。脚と胴体、腕・肩の運動が可能なPR3に分類される。男女2名ずつの漕手と、コックスと呼ばれる指示役の舵手1名(健常者可)の合計5名からなる。漕手は視覚障害が肢体不自由が条件となり視覚障害の選手はチームに最大2人まで、五輪と同様、直線レーン2,000mのタイムを競う。日本チームの舵手・立田寛之選手は健常者で、漕手の八尾陽夏選手は右半身に障害をもつ。



“大きな意義”秘めるパラ競技 多くの気づきを得る

立田 寛之(たつた ひろゆき)選手

Profile

1992年生まれ、北海道出身。戸田市在住。石狩翔陽高校からボートを始め、舵手一筋。大学時代、大学選手権や全日本選手権を制覇。2017年のアジア選手権「男子エイト」では日本の銀メダル獲得に貢献。競技歴14年。

——改めて大会を振り返ってみて、お二人にとって東京パラとはどういった大会でしたか。

八尾 ■ 私自身、今大会限りでの競技引退を決めて臨んだレースでしたので、「すべてを出し切ろう」と想いを込めた大会でした。試合中は必死でしたが、レース後はいろいろな想いが溢れ、思わず号泣してしまいました。悔しい気持ちはもちろん、皆さんへの感謝の気持ち、このクルーで出場できた喜び……いろいろな感情が溢れました。今後は、1つのことに向かって頑張っていくことの大切さを、皆さんに伝えていけたらと思います。

立田 ■ もともとパラ競技への挑戦は、コックスの技術を磨くためでした。特に「男子エイト※」には強い想い入れがあり、いずれ五輪への挑戦を再開する意向でした。しかし、今はパラへの興味の方が勝っています。理由は2つ

あります。1つは東京パラでやり残したことがあること、もう1つはパラの方がメディアからの取り上げられ方や注目度が高く、「大きな意義」を感じたからです。

ボート競技はまだ狭い世界です。しかし、パラと繋がることで世界が大きく広がり、今大会では「多様性の象徴」として多くのメディアから熱い視線が注がれました。東京パラをきっかけに、「ボート競技を始めて知った」「立田選手のおかげでパラが面白いと感じ



ボート競技「PR3男女混合舵手つきフォア」		
期間	2021年8月27日(金)～29日(日)	
会場	海の森水上競技場(東京都江東区)	
選手	立田 寛之(戸田中央総合病院ローイングクラブ)、八尾 陽夏(戸田中央総合病院ローイングクラブ)、木村 由(湖猿)、有安 諒平(湖猿)、西岡 利拡(琵琶湖ローイングクラブ)	

大会結果		
1位	イギリス	7分09秒08
2位	アメリカ	7分20秒13
3位	フランス	7分27秒04
...
12位	日本	8分36秒89

ました」とのメッセージも多くいただきました。むしろパラ競技に挑戦する方が自分にとって大きいテーマだと気づいたのです。次に向けて今は「勝たせられるコックスになりたい」「世界との距離を縮めたい」との想いが強くなりました。

——お二人の益々のご活躍、楽しみにしております。ありがとうございました。

※「ボートの華」と呼ばれ、8人で漕ぐ「男子エイト」。ボート競技のなかで最も大きいボートを使い、時速約20キロにもなる高速レースが見どころ。



思い込め すべてを出し切った大会

八尾 陽夏(やお はるか)選手

Profile

1997年生まれ、和歌山県出身。埼玉県内在住。右半身麻痺の障害を持つ。中学・高校では陸上パラ競技で活躍。2013年のアジアユースパラ競技大会は走り幅跳びなど3種目で優勝。大学2年からボートに転向した。

ボランティア体験記

大会の盛り上がりや裏で支えたボランティア。その献身的な姿に世界から絶賛の声が上がりました。ここではボランティアに参加されたTMG職員の皆さんの体験記を記します。

東京2020オリンピックの活動報告

よこすか浦賀病院
院長 阿部 裕 先生
競技: サッカー(横浜国際総合競技場)

私は、東京2020オリンピック大会の横浜国際総合競技場(日産スタジアム)で開催された、サッカー競技のボランティアをしました。

一般応募のボランティアとは異なり、神奈川県サッカー協会から派遣されたメディアスタッフとしての参加でした。私たちの仕事は、主に選手対応であり、あとは各国の代表チームの関係者(VIP)の対応でした。選手対応は医務室業務と試合中にけが人の搬送をする担架隊業務でした。国際大会では担架反応のチームには必ずDr.が一人いることになっております。横浜国際総合競技場では男女合わせて、9日間で12試合が行われましたが、私は8日間お仕事をさせていただきました。大きな事故・怪我はなく、会場でのクラスター発生もなく、無事業務を終えることができました。本来なら、72,000人の大観衆のなかでの仕事ができるはずだったので、大変にもの寂しさを感じましたが、金メダルを目指して一生懸命に戦っている選手たちの姿はとても素敵でした。

担架隊業務を担う一瞬

けが人を想定した訓練の様子 会場での業務の様子

歴史的大会へ

戸田中央総合病院
理学療法士 島拓也 さん
競技: ボート(海の森水上競技場)

今回参加するにあたり、尽力していただいたすべての関係者の方々に、心より感謝申し上げます。コロナ禍の中、大会の延期、事前準備での不安などさまざまなものがあり私自身、複雑な心境でもありましたが、アスリートたちが安心して競技に専念できるよう尽力できたこと、とても嬉しく思います。両大会とも無観客ながら、選手の気迫には圧倒されるものがありました。人間の身体の可能性、力を合わせることで成し遂げられる素晴らしさを肌で感じる事ができました。今後は、メディカルスタッフとして大会等に関わらせていただけるように精進したいと思います。

メディカルスタッフとして参加

ボランティアに参加して

戸塚共立第1病院
看護師 中澤 映久子 さん
競技: ソフトボール・野球(横浜スタジアム)

横浜スタジアムでオリンピックメディカルスタッフとして参加してきました。消防・医療システムの申し送り後に医師と医務室で待機しました。事前に研修を受けていたのですが、有事に備え緊迫感がありました。無観客のスタジアムでは炎天下の中、選手同士の声だけが響いていたのが印象的です。今回、コロナ禍の混乱の中での選手や関係者のご苦勞の一隅がみえました。開われたことが嬉しく、感謝しています。

一生に一度の貴重な体験

戸塚共立第2病院
看護師 渥美 洋平 さん
競技: 野球(横浜スタジアム)

横浜スタジアムで開催された野球(韓国・ドミニカ戦)のメディカルスタッフとして参加させていただきました。当初は観客に対して対応する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い無観客開催となった為、メディア・大会関係者だけへの対応となってしまいました。観客がいない横浜スタジアムは異様な雰囲気でしたが、無事に活動を終えることができました。貴重な経験をありがとうございました。

多職種連携の重要性を実感

北総白井病院
看護師 阿部 恵 さん
競技: フェンシング、テコンドー、レスリング(幕張メッセ)

医療従事者としての、これまでの経験を生かしボランティアに参加したいと考えました。残念ながらコロナ禍により無観客でしたが、レスリング会場などでは医療従事者チームで春損を想定したシミュレーションを毎日行っていました。ある時は患者役としてレスリングマットに倒れているところからバックボードにガチガチに固定されて運ばれるなど、普段は経験することができないような体験も出来、多職種での連携の重要性について改めて考える良い経験になりました。

聖火リレーに参加

とだ優和の社
浜田 美咲さん
7/6 戸田市の聖火ランナーとして走行

戸田中央総合病院
ローイングクラブ所属
坂口 宥太選手
8/24 パラ聖火ランナーとしてトーチキスを行う

狭山神経内科病院
沖野 亜妃さん
訪問リハビリ利用者さま(聖火ランナー)の走行支援・コミュニケーション(文字盤での支援)を手伝う「炎の熱さや沿道の声援を共有させていただき、沢山の感動をもらいました」